

女兒の乳房について

小学校2〜3年生の二次性徴発現時には女兒においては乳房の發育があるが、ときに痛みやしこり、さらには左右差を認め、検査を希望される親が数人あります。婦人科の受診を勧めています。どの程度までは紹介しなくてよく、どの程度以上は紹介すべきかお教え下さい。

(岐阜県・福富 悌、小児科)

回答 北里大学医学部小児科

講師 横田行史

小学校2〜3年生(7歳〜9歳)に生じた乳房腫大の原因と対処法について概説する。表に小児の乳房腫大の原因を示す。質問の思春期初来年齢前後における乳房腫大の原因は、正常な思春期初来(7歳6カ月以降)、思春期早発症(7歳6カ月未満のエストロゲン効果)、および早発乳房(エストロゲン効果によらない)が

大部分を占める。炎症性疾患や腫瘍性疾患はまれで、とくに乳癌は非常にまれで症例報告が散見されるにすぎない。乳腺炎(乳房炎)は片側性に生じ、局所に炎症の四徴候(熱感、疼痛、腫脹、発赤)を認め、温湿布、抗生剤投与、全身感染徴候の観察などが必要である。小児の腫瘍性乳腺疾患は、ほとんどが良性で片側性に生じ、血管腫、脂肪腫、乳頭腫、リンパ管腫などが知られている。この中では、血管腫が一番多く、通常思春期の乳房腫大に伴い消失するので外科的治療は必要ない。外科的治療は、片側乳頭芽損傷を生じる可能性があり注意が必要である。正常な乳房初来が片側性的場合には腫瘍性疾患との鑑別が必要になるが、思春期初来の場合には6カ月以内に他方の乳房腫大や他の二次性徴の徴候が出現する。したがって、良性の乳腺腫瘍が疑われる場合には、外科的処置よりも経過観察すべきである。炎症性で内科的治療に抵抗性の場合や、どうしても悪性の可能性を否

小児期の乳房腫大の原因（文献 1）を一部改変）

1. 片側性乳房腫大

血管腫
脂肪腫
乳頭腫
リンパ管腫
嚢胞
線維症
乳腺炎、乳房炎
血腫
脂肪壊死
周辺組織の腫瘍
乳房発育（正常な）
乳癌

2. 両側性乳房腫大

早発乳房
思春期早発
真性性早熟症
外因性エストロゲン暴露
内因性エストロゲン産生増加（卵巣腫瘍など）
甲状腺機能低下症（オーバーラップ症候群）
乳房発育（正常な）

定できないときのみに、乳頭芽の保存に充分気をつけて外科的処置を行うべきである。また、腫瘍性ないしは炎症性乳腺疾患を疑った場合には、外科医にコンサルトすべきである。

女兒における思春期の初来は、通常乳房発育から始まり、恥毛出現、初潮へと進行する。厚生省研究班による中枢性思春期早発症の診断基準（平成15年改訂）では、乳房は7歳6カ月未満で初来した場合に病的と判断される。思春期早発症は、エストロゲン産生性卵巣腫瘍などによる器質性原因、ないしは特発性（中枢性）に生じ、二次性徴が初来、進行する疾患で、乳房初来以外の徴候を伴う。例えば、身長促進を伴う骨成熟の進行（骨年齢の促進）である。骨年齢は、レントゲン撮影が必要であるが、身長促進は成長曲線を作成するだけで重要な情報が得られる。母子手帳、幼稚園・保育園、小学校の健康手帳などのデータを用いて、身長・体重を成長曲線にプロットする。通常の思春期初来で

は、乳房初来の時期に先行して身長スパートを認める。つまり、発症前に比して、身長カーブが上にシフトする。血液検査では、思春期前には測定感度以下に低いエストロゲンが、思春期レベルに高くなり、ゴナドトロピン（LHとFSH）は、特発性では思春期レベルに、器質性では通常感度以下になる。乳房初来に加えて、身長スパートなどの思春期徴候を認める場合には、思春期早発症の可能性を考慮し、小児内分泌医に依頼する必要がある。乳房腫大の原因として病的異常がなく、他に二次性徴の徴候がない場合を早発乳房と称する。とくに治療の必要がないが、3カ月毎に経過観察し、他の二次性徴の初来や身長スパートに注意を払う必要がある。

さて、7歳6カ月以降に乳房腫大が出現し、正常な思春期初来と判定された場合、病的ではないので放置してよいことになる。しかし、例えば小学校1年生（7歳6カ月）で乳房初来、

2年生（8歳）で恥毛出現というのは、性成熟が早すぎるように感じられる。とくに、思春期初来前の身長が低いと、思春期スパートにより一時的に身長カーブが上にシフトするが、骨成熟が進行するため、より低身長の度合いがひどくなる可能性がある。また、精神年齢が低いと、二次性徴に伴う身体変化や性衝動に対応できない場合や、さらには、外見上の問題で、いじめの対象にされる可能性がある。このような場合、ご両親と小児内分泌医との話し合いで対応を検討する必要がある、コンサルトを依頼すべきである。

文献

- 1) Simmons, RS, Breast Disorder. In: Santfilippo JS (ed) Pediatric and Adolescent Gynecology 2nd ed. pp603~620. WB Saunders, Philadelphia(2001)
- 2) 中枢性性早熟症診断の手引き、厚生労働省厚生科学研究所補助金特定疾患対策研究事業 間脳下垂体機能障害に関する調査研究班、平成13年度総括報告書 pp 34~35 (2002)